2023年 8月 21日

協伸商会穀物レポート［KKR］Vol. 061
（2023/24年度　USDA米国農務省 8月11日発表）

［ハイライト］

① 世界穀物生産は一部地域の乾燥/多雨による減産はあるが全体的には堅調、期末在庫は増加、市場価格は軟調

大豆も含め世界穀物生産見通しは北半球に於ける冬小麦の収穫進展、米国中西部に於ける降雨によるとうもろこしの作柄改善期待、南米ブラジルの大豆の豊作予想等から全般的に前年を上回り堅調な見通しとなっている。この状況を受け在庫も積み上がり期末在庫率は小麦/コメ/大豆とも安全在庫率と言われる30%を上回っている。また市場価格はコメを除き軟調で推移し、特にとうもろこしは前月比0.77㌦/buと大幅に下落し、21年１月以来久方ぶりに５㌦/buを割り込んだ。

② 一方、世界的な異常気象多発による農作物生産への懸念が広がっている

堅調な穀物生産見通しが出ている中で、一方では最近多発している世界的な異常気象に対する警戒も強める必要がある。人間活動による地球温暖化に加え、記録的な猛暑/豪雨を引き起こす要因は以下の３件と言われている。◎この冬にかけて懸念される「スーパーエルニーニョ」現象 ◎太平洋熱帯域での昨年「ラニーニャ」現象の名残り ◎インド洋西部の海面水温上昇（ダイボールモード現象）。最近報道されるカナダ/米国/スペイン/ハワイ等に於ける大規模火災はその兆候とも言える。

③ ロシアの黒海穀物回廊合意離脱によってUKR産穀物輸出に暗雲、他方ロシアは世界最大の小麦輸出国に

今回のUSDA報告によるとUKRの小麦/コーン輸出見通しは其々10.5/19.5百万㌧と先月と変わらないが、ロシアは黒海回廊合意から離脱後、オデーサ港等の穀物積み出し施設へのミサイル等攻撃や船舶への威嚇を行っており、これが実現出来るかは微妙な状況と言える。一方。ロシアの今年度の小麦生産は昨年92⇒85百万㌧に減少したとは言え依然豊作であり、輸出は昨年45.5を上回る48百万㌧の見通し。皮肉なことに地球温暖化と黒海回廊閉鎖によるUKR産穀物輸出困難が寄与している。

１、世界穀物需給の概要

① **生産量：** 2,812百万㌧（ 前年比2.4% 増↑、前月比0.7% 減↓ ）
② **消費量：** 2,806百万㌧（ 前年比1.3% 増↑、前月比0.5% 減↓ ）
③ **貿易量：** 498百万㌧（ 前年比1.5% 増↑、前月比1.6% 減↓ ）

2、小　麦

① **生産量：** 793百万㌧（ 前年比0.4% 増↑、前月比0.4% 減↓ ）
② **消費量：** 796百万㌧（ 前年比0.2% 増↑、前月比0.4% 減↓ ）
③ **輸出量：** 209百万㌧（ 前年比4.2% 減↓、前月比1.1% 減↓ ）
⑤ **在庫量：** 266百万㌧（ 前年比1.0% 減↓、前月比0.3% 減↓ ）　/（在庫率 33%）うち中国135百万㌧、占有率51%
④ **価　格：** $6.33/Bu　（前年$7.75/Bu　/　前月$6.40/Bu）　と前月比$0.07　下落。
⑤ **概　況：** 世界の生産量は前年比では若干上回っているが、前月比では乾燥による EU/中国/カナダ等の減産の為３百万㌧減少した。消費量も前月比で微減、輸出量は底堅く２億㌧台を維持している。黒海回廊停止によるUKR輸出がどうなるかが波乱要因である。

3，とうもろこし

① **生産量：** 1,214百万㌧（ 前年比5.4% 増↑、前月比0.9% 減↓ ）
② **消費量：** 1,200百万㌧（ 前年比3.1% 増↑、前月比0.5% 減↓ ）
③ **輸出量：** 196百万㌧（ 前年比10.5% 増↑、前月比1.0% 減↓ ）
④ **在庫量：** 311百万㌧（ 前年比4.4% 増↑、前月比1.0% 減↓ ）　/（在庫率 26%）うち中国201百万㌧、占有率65%
⑤ **価　格：** $4.84/Bu　（前年$6.10/Bu　/　前月$5.61/Bu）　と前月比$0.77　下落。
⑥ **概　況：** 世界生産量は米国/EU等が乾燥、中国が多雨の為減産となり前月比では11百万㌧の減少となったが12億㌧台を維持し,前年より約５％の増産見通し。 消費/輸出量とも前月比微減したが前年比では大きく上回る見通し。在庫量は生産が消費量を上回る為３億㌧を超え、在庫率は26%となる見通し。価格は大きく下落し５㌦を割り込み年初より約２㌦近い下げとなった。

4，大　豆

① **生産量：** 403百万㌧（ 前年比8.9% 増↑、前月比0.6% 減↓ ）
② **消費量：** 384百万㌧（ 前年比5.7% 増↑、前月比0.1% 減↓ ）
③ **輸出量：** 169百万㌧（ 前年比0.1% 減↓、前月比0.3% 減↓ ）
④ **在庫量：** 119百万㌧（ 前年比15.8% 増↑、前月比1.3% 減↓ ）　/（在庫率 31%）うちBRA 40/ARG 24百万㌧
⑤ **価　格：** $14.44/Bu　（前年$16.15/Bu　/　前月$14.86/Bu）　と前月比$0.42　下落。
⑥ **概　況：** 世界生産量量は米国で乾燥の為前月比３百万㌧減少したが、全体的には４億㌧を超え前年比約９％の大幅史上市場最高見通し。消費量も中国が堅調で前年比増加見通しだが生産の伸びに追いつかず期末在庫は1.2億㌧と増大し、価格も下落した。

以上

世界の穀物・大豆等の需給

2023年8月11日
米国農務省発表：　単位１００万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,799	3,593	514	2,801	793
	2021/22		2,746	3,539	491	2,771	768
	2022/23	7月	2,831	3,597	506	2,820	777
	2023/24	8月	2,812	3,580	498	2,806	774
小麦	2020/21		781	1,065	203	793	273
	2021/22		790	1,063	219	794	268
	2022/23	7月	797	1,066	212	799	267
	2023/24	8月	793	1,062	209	796	266
粗粒穀物（とうもろこし等）　注１	2020/21		1,504	1,827	254	1,489	338
	2021/22		1,443	1,781	217	1,455	326
	2022/23	7月	1,513	1,837	238	1,497	340
	2023/24	8月	1,497	1,823	236	1,487	337
米	2020/21		514	701	57	519	182
	2021/22		513	695	55	522	174
	2022/23	7月	521	694	56	524	170
	2023/24	8月	521	695	53	523	172
大豆	2020/21		360	460	154	361	99
	2021/22		370	469	169	366	103
	2022/23	7月	405	508	169	385	124
	2023/24	8月	403	506	169	384	122

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	7月	296.30	1,224.47	188.40	1,206.65	198.26	314.12
	8月	297.92	1,213.50	187.11	1,200.37	196.19	311.05
アメリカ	7月	35.60	389.15	0.64	314.59	53.34	57.45
	8月	37.00	383.83	0.64	313.45	52.07	55.94
アルゼンチン	7月	1.51	54.00	0.01	13.50	40.50	1.51
	8月	1.51	54.00	0.01	13.50	40.50	1.51
ブラジル	7月	7.97	129.00	1.20	76.50	55.00	6.67
	8月	8.97	129.00	1.20	77.50	55.00	6.67
EU	7月	7.08	63.40	24.00	82.10	5.00	7.38
	8月	7.19	59.70	24.00	79.50	4.10	7.29
日本	7月	1.40	0.01	15.50	15.50	0.00	1.42
	8月	1.37	0.01	15.50	15.50	0.00	1.39
中国	7月	205.32	280.00	23.00	304.00	0.02	204.30
	8月	205.32	277.00	23.00	304.00	0.02	201.30
ロシア	7月	0.91	16.30	0.05	11.90	4.20	1.16
	8月	0.91	14.60	0.05	10.60	4.20	0.76
ウクライナ	7月	1.39	25.00	0.00	5.50	19.50	1.39
	8月	1.39	27.50	0.00	5.50	19.50	3.89

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	7月	102.90	405.31	166.57	384.51	169.29	120.98
	8月	103.09	402.79	166.25	383.94	168.77	119.40
アメリカ	7月	6.95	117.03	0.54	66.01	50.35	8.16
	8月	7.08	114.45	0.82	66.01	49.67	6.67
アルゼンチン	7月	17.55	48.00	5.70	42.95	4.60	23.70
	8月	17.70	48.00	5.70	42.95	4.60	23.85
ブラジル	7月	33.05	163.00	0.45	59.70	96.50	40.30
	8月	32.95	163.00	0.45	59.70	96.50	40.20
中国	7月	36.77	20.50	99.00	118.00	0.10	38.17
	8月	36.77	20.50	99.00	118.00	0.10	38.17
EU	7月	1.61	3.22	14.00	16.74	0.30	1.78
	8月	1.61	3.02	14.10	16.74	0.30	1.68

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	7月	269.31	796.67	207.96	799.45	211.62	266.53
	8月	268.31	793.37	207.39	796.07	209.39	265.61
アメリカ	7月	15.79	47.33	3.54	30.81	19.73	16.12
	8月	15.79	47.20	3.54	30.73	19.05	16.75
アルゼンチン	7月	2.93	17.50	0.01	6.60	12.00	1.84
	8月	2.93	17.50	0.01	6.60	12.00	1.84
オーストラリア	7月	2.84	29.00	0.20	7.70	21.50	2.84
	8月	2.84	29.00	0.20	7.70	21.50	2.84
カナダ	7月	2.54	35.00	0.60	9.10	26.50	2.54
	8月	2.54	33.00	0.60	9.10	24.50	2.54
EU	7月	17.66	138.00	7.00	109.50	38.50	14.66
	8月	17.16	135.00	7.00	107.50	38.50	13.16
中国	7月	139.03	140.00	12.00	153.00	0.90	137.13
	8月	138.82	137.00	12.00	152.00	0.90	134.92
インド	7月	9.50	113.50	0.10	108.10	1.00	14.00
	8月	9.50	113.50	0.10	108.10	1.00	14.00
ロシア	7月	16.64	85.00	0.30	42.00	47.50	12.44
	8月	16.14	85.00	0.30	42.00	48.00	11.44
ウクライナ	7月	1.63	17.50	0.06	7.10	10.50	1.59
	8月	1.65	21.00	0.08	8.10	10.50	4.13

脚注１：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約８０％がとうもろこしである。
脚注２：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：９月～8月。

世界主要国の農業と穀物需給の行方…インド(5)

❶ 先月はインドの生乳/牛肉生産の特異な生産構造等について述べたが、今月は世界の穀物需給に大きな影響を及ぼす可能性のあるインドに於ける配合飼料生産の現状と将来予想について述べたい。世界の穀物生産に対する配合飼料の比率は、[表1]に見る通り大豆も含めた世界穀物生産量31.1億ﾄﾝ(27.4＋3.7億ﾄﾝ)に対して12.4億ﾄﾝとほぼ40%を占め、極めてその存在は大きい。因みに、配合飼料原料の約95%が穀類とその副産物であり、コーンの約6割/小麦の約2割/大豆粕の大半は配合飼料原料として利用されている。

❷ [表1]のAlltech社調査の「国別配合飼料生産量」を見ると、中国/米国が其々2億ﾄﾝを超え両国生産量合計は約5億ﾄﾝと約4割を占め圧倒的な存在であるが、3位に近年畜産生産拡大の著しいブラジル8千万ﾄﾝ、その後にいつの間にかインドが44百万ﾄﾝと続いている。ところが、44百万ﾄﾝもあるこの肝心のインドの配合飼料生産実態/業界の全体像がいくら調べても出てこないのが不思議である。これは、まともな統計資料がないのか？業界が未成熟なのか？畜産物生産量かコーン生産量から類推しているのか？？？…よく分からないが、唯一確認できたのが年間480万ﾄﾝの同国鶏肉生産を支えるブロイラーインテグレーターの存在である。

❸ alic(農畜産業振興機構)の2019年報告では、インド資本のVH社/SG社/SF社の3社が其々インテグレーターとして生産から加工/販売までの一貫した基本機能を有しており、そのブロイラー生産生地域は菜食主義者の少ない中南部と都市部を抱えた北部の主要10州で全体の約9割を占め、生産量の8割は養鶏農家へ生産委託、その規模は最小千羽/最大3万羽/平均1万5千羽程度と極めて小規模。且つその鶏肉流通形態は、①インテグレーターによる直営処理/加工/量販店等販売が僅か約1割、②インテグレーターから生鳥のまま伝統的な鶏肉小売店やウエットマーケット流通が何と9割と極めてインド的実態であり、ある意味インドの社会構造を現わしている。

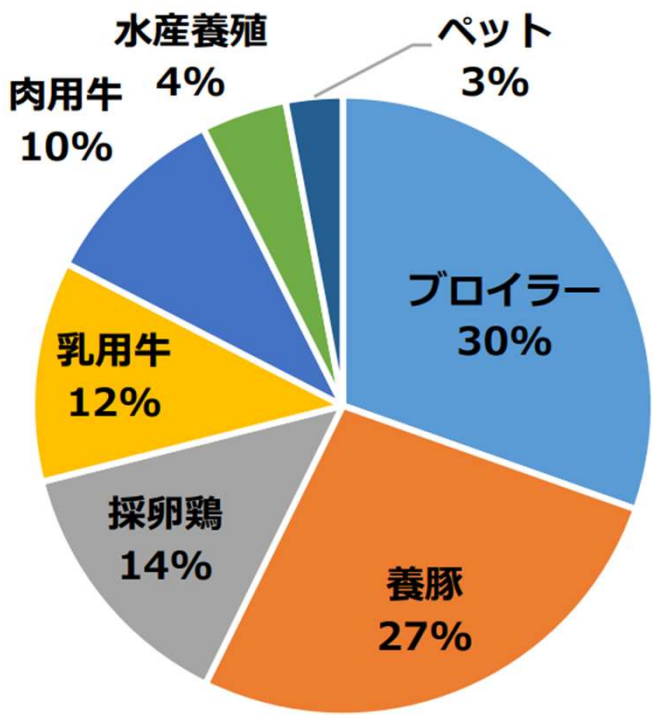
❹ [表2]はAlltech社調査による世界の配合飼料の畜種別生産比率であるが、インドはこの世界平均には全く当てはまらない。USDAによればインドの配合飼料生産の約7割が養鶏用(採卵鶏含む)、約1割が酪農、約1割が水産、残りはその他。つまり、配合飼料は宗教的制約のなく飼料効率の高い養鶏用に集中し、養豚用は数字にならない。また、水産用は日系Feed One子会社「ニッパイ・シャリマー・フィード」の事業展開が注目される。飼料原料は制度としては年間50万ﾄﾝのコーン輸入無税枠はあるが政府許可が下りにくく、且つGMOコーン/大豆の輸入及び栽培が禁止されており、ほぼすべてが国産原料で成り立っている点が特徴的である。

❺ 配合飼料生産44百万ﾄﾝのインド国産原料手当てを推測すると、コーン生産量34百万ﾄﾝの約6割⇒20百万ﾄﾝ、小麦フスマ1.1億ﾄﾝ×13%⇒14百万ﾄﾝ、大豆粕国内利用7百万ﾄﾝ、その他コメ/小麦の飼料利用等を考慮すれば数字的には賄えそうだが、畜種別配合割合や業界実態等は定かではなく[表3]に記載される様なメーカーも見当たらない。今後インドは経済発展と共に、食肉消費/配合飼料生産の拡大が予測されるが、原料手当ての動向が大きな注目であると同時に、世界全体の穀物需給にも大きな影響を及ぼす可能性がある。(続く)

【表1】飼料生産上位10カ国（2021年）

国名	飼料生産量（千トン）
中国	261,424
アメリカ	231,538
ブラジル	80,094
インド	44,059
メキシコ	38,857
スペイン	35,580
ロシア	33,000
トルコ	25,300
日本	24,797
ドイツ	24,506
世界計（2021年）	1,235,500
世界計（2012年）	959,200

【表2】畜種別の飼料生産量（2021年）



【表3】世界の飼料業界の概況

順位	社名	国	飼料生産量（千トン/年）	飼料工場数
1	CP Group	タイ	28,175	–
2	新希望集団	中国	28,000	200
3	海大集団	中国	19,630	–
4	Cargill	アメリカ	19,600	39
5	Land O'Lakes	アメリカ	13,500	–
6	牧原食品	中国	13,110	–
7	JBS S.A.	ブラジル	11,000	49
7	双胞胎集団	中国	11,000	–
9	BRF	ブラジル	10,071	27
10	For farmers	オランダ	10,000	35
10	Tyson Foods	アメリカ	10,000	32
10	Wen's Food Group	中国	10,000	–
17	JA全農	日本	7,200	22